統語的省略と自由拡充との境界
ー『モダン・ファミリー』を題材として*

濱　松　純　司

1. はじめに

英語学習において, 省略箇所を補う, ということがよく言われる。ここで「省略」ないしは「補う」とは，内省してみると，漠然とそう言っているだけで，必ずしもその本質について明確に意識していない場合も多いと思われる。「行間を読む」などともよく言われるが，「行間」とは一体何かは判然としない。ややもすれば, 勘のようなものと同義になりかねない。多くの場合, 恐らく「文脈」から読み取る，ということになると思われる。とりわけ会話においては，文脈に依存する部分が多くなることから，「省略」も必然的に増えることとなる。会話は一見，学習者にとって語学的には易しいと思われがちであるが，実は補わなければならない要素が多いことから，むしろ書き言葉より解釈が厄介な場合も少なくない。AI による自動翻訳にとっても，最大の困難の一つは会話文の解釈にあると思われる。澤田 (2016) から実例を見てみたい。(1) はラジオドラマの例で，質屋の Castle 氏と知り合いの Gomly 夫人とのやり取りである。この会話では，(2) のような省略が見られる。

(1)　Castle:　How are you, Mrs. Gomly?
　　Gomly:　Er ...just ...just fine, Mr. Castle.

* 貴重なコメントをいただいた編集委員の先生方に感謝申し上げる。資料整理等で協力してくれた学部ゼミ生の船間大紀君にも謝意を表したい。本稿の不備等は全て筆者の責任である。本研究は令和 3 年度 専修大学研究助成・個別研究「英語におけるメンタル・レキシコンの構造」の助成を受けている。

Castle: Good ..., glad to hear it.

Gomly: Er ...how have you been?

Castle: Oh ...can't complain. （澤田 2016:25）

(2) a. (I'm) just fine.

b. (It's) Good. （澤田 2016:27）

c. (I'm) glad to hear it. （澤田 2016:27）

(2) においては文法的要素である代名詞主語及び be 動詞が省略されている。[1] 澤田（2016:27）によると，これは話し言葉におけるもっとも顕著な特徴とされ，文脈から復元可能な文法要素が消失したもので，Quirk et al. (1985) に従い，状況省略（situational ellipsis）と呼んでいる。これは完全に文脈に依存した省略であることから，語用論上の省略と考えることができる。一方で，同じラジオドラマからの例である (3) はどうだろうか。

(3) a. ... One dollar, it is then. I wish it could be more, Mrs. Gomly. I really do.

b. I've reached my limit. I don't know what to do anymore. I honestly don't.

c. Mrs. Gomly, if I could spare a dollar, I'd give it to you. Believe me, I would.

（澤田 2012:70-71）

これらも省略である点では同じであるが，do(n't)/ would が現れていることから，(4) に示す通り，直後に動詞句（VP）が省略されていることを示唆している。

(4) a. I really do [$_{VP}$ ~~wish it could be more~~].

b. I honestly don't [$_{VP}$ ~~know what to do anymore~~].

c. Believe me, I would [$_{VP}$ ~~give it to you~~].

より正確に言えば，省略された部分が直前の文から復元される点では文脈

---

[1] (1) における最後の発話では，(i) に示す通り，時制文において主語が省略されるという，英語では通常あり得ない現象が観察されるように見えるが，この種の現象は本稿では扱わない。当該の発話は (i) のような文法的要素（主語）の省略を含むのではなく，澤田（2016:27）に従い，定型表現と見做す。

(i) (I) can't complain.

に依存することに変わりはないが，音形として現れなくても，依然として動詞句は存在するという点で，単に文脈から意味的に補うのとは異なり，文法的性質が強いと言える。

本稿では，濱松（2021）に続き，米国のＴＶ番組のコメディドラマ『モダン・ファミリー』（*Modern Family*）のスクリプトに現れる発話の分析を通じ，省略には文法的・統語的性格が色濃いものと，文脈から純粋に語用論的に補われるものの２種類があることを示す。この区別を意識することが，英語学習にも有用である点にも触れる。

本稿の構成は以下の通りである。次の第 2 章において，関連性理論の概略及び明示的意味である表意を得るプロセスについて説明した上で，第 3 章ではコメディドラマである『モダン・ファミリー』における発話を取り上げ，２種類の省略のプロセスを具体的に適用し，分析をおこなう。第 4 章では，これらのプロセスの外国語学習における意義について触れ，全体のまとめとする。

2. 統語論と語用論との境界

理論言語学においては，省略は文法によって規定される統語的省略の場合と，完全に文脈によって補われる場合の二通りがあるとされる。例えば，(5B) の発話は，(5A) への問いへの答えとしてなされていることから，(6) の通り省略がなされていることは明らかであり，他の解釈が入る余地はないと言える。

(5)　A: Who broke the window?
　　B: Tom did.

(6)　Tom did [$_{VP}$ ~~break the window~~]

(6) において，動詞句（VP）は音形を持たないだけで，統語的には存在するものと考えられる。

これに対し，朝食の準備をしている聞き手がマーマレードを探しているのに話し手が気づいた際になされた以下の発話はどうだろうか。

(7)　On the top shelf.　(Carston 2002:17)

東森・吉村（2003:37）も述べる通り，この種の発話は，発話に対する応答ではなく，談話の最初の発話であることから，(7) の命題内容には未確定な部分が多い。そこで，文脈から主語と動詞を補い，(8) のような表意に発展させることになる。

(8)　The marmalade is on the top shelf.

(5B) との大きな違いは，(7) の発話は文脈により様々に補うことが可能であるという点にある。例えば，同一の文脈であっても，以下のように補うことも出来るであろう。

(9)　You can find the marmalade on the top shelf.

(8) 及び (9) において，前置詞句以外の要素は，発話を命題の形とする為に，文脈より純粋に語用論的に補われたものであり，統語的実在を持たないという点が重要である。語用論の理論の一つである関連性理論では，このプロセスを自由拡充（free enrichment）と呼ぶ。

澤田（2016:29）は統語的省略の例として，以下の例を挙げている（△は省略された部分を表す）。[2]

(10)　A: When are you going to leave?

　　B: △ Next Friday.

この例について，澤田はおおよそ次のように述べている。対話文で発生する省略という点では，語用論上の省略と似ているが，統語的省略は原則として，文法構造上の平行性を必要とする点で異なる。語用論上の省略では，文法構造上の平行性により省略された要素が文脈から復元されるが，状況省略では，話し手と聞き手が共有する場面や知識から復元される。従って，統語的省略と語用論上の省略とは区別されるべきであると澤田は主張する。

ここで統語的省略について概観しておく。まず，上の (6) に見られるような VP 省略（VP ellipsis）が挙げられる。これは，複数の動詞句が起こる場合，

[2] 澤田は Quirk et al. (1985) に従い，統語的省略を状況省略に対して「テキスト省略」（textual ellipsis）と呼んでいる。

それらが同一であれば，いずれかの動詞句の音形を省略する現象である。[3] 中村・金子（2003）によると，この VP 省略は (11) のように，等位節（11a），従属節（11b），及び対話文（11c）などに見られる他，(12) の通り，不定詞の直後にも起こる。

(11) a. John rarely eats natto but Chris often does [$_{VP}$ ~~eat natto~~].
b. Because John might eat natto, Chris will [$_{VP}$ ~~eat natto~~].
c. Did Chris eat natto? － Yes, he did [$_{VP}$ ~~eat natto~~].

（中村・金子 2003:112）

(12) John wasn't sure he'd get in shape, but he tried to [$_{VP}$ ~~get in shape~~].

（中村・金子 2003:113）

別の種類の統語的省略として，間接疑問縮約（sluicing）と呼ばれるものがある。これは (13) のように，間接疑問文において，wh 句を除いた部分の節（TP）の音形を，先行する文と同一であるとの条件下で省略したものである。[4]

(13) a. Tom knows that I went, but his wife doesn't know [$_{CP}$ why / when / where / how [$_{TP}$ ~~I went~~]].
b. Mary was reading, but nobody knows [$_{CP}$ what [$_{TP}$ ~~she was reading~~]].

（中村・金子 2003:117）

次に，語用論上の省略を見る前に，関連性理論について簡単に概観しておく。[5] 関連性理論は，文字通り，関連性（relevance）の概念を理論の中核に据えている。発話が関連性を持つ（relevant）とは，処理労力を最低限に抑えながら，既知の想定の強化または訂正といった認知効果（cognitive effect）を得ることである。更に，人間の認知は関連性を最大化する性質を有してお

[3] 何を以て「同一」と見做すかは必ずしも容易な問題ではないが，ここでは扱わない。
[4] 中村・金子（2003）は，節の統語範疇を IP としているが，ここでは以下の本文との整合性から TP とした。
[5] 関連性理論の概説として，最重要文献である Sperber and Wilson (1995) の他，Carston (2002), Sperber and Wilson (2006), Wilson and Sperber (2012) 及び Wilson (2017) 等が挙げられる。日本語で書かれたものには，今井（2001; 2015），東森・吉村（2003）及び吉村（2013）等がある。

り，発話はそれ自体が最大の関連性を持つことを（聞き手に）期待させるとしている。[6] Sperber and Wilson (1995) は，(14) の通り，「最適な関連性の期待」（Presumption of optimal relevance）を定義している。更に，彼らは，関連性理論における解釈手順（Relevance-theoretic comprehension procedure）として (15) を掲げている。

(14) Presumption of optimal relevance

a. The utterance is relevant enough to be worth processing.

b. It is the most relevant one compatible with the communicator's abilities and preferences. (Sperber and Wilson 1995: 266–78)

(15) Relevance-theoretic comprehension procedure

a. Follow a path of least effort in computing cognitive effects: Test interpretive hypotheses (disambiguations, reference resolutions, implicatures, etc.) in order of accessibility.

b. Stop when your expectations of relevance are satisfied (or abandoned).

(Wilson and Sperber 2006:613)

(14) によると，最適な関連性を満たすような解釈を発見するという聞き手の目的を達成する為に，聞き手は発話を肉付けし，文脈的想定を加えることで結論及び認知効果を引き出す。具体的には (15) の手順に従って，解釈上の仮説（曖昧性の除去, 指示表現の特定, 推意等）を入手しやすさ（accessibility）の順に試し，関連性の期待が満たされた時点で解釈を終了する，ということになる。

関連性理論に限らず，語用論一般において広く明示的意味と非明示的意味の区別がされる。 (16) のやり取りにおいて，B が伝達したい意味は，文字通りの意味，つまり明示的意味にあるのではなく，非明示的意味の方にあると

[6] Sperber and Wilson (1995) はこれらをそれぞれ関連性の認知原理（Cognitive Principle of Relevance）と関連性の伝達原理（Communicative Principle of Relevance）と呼んでいる。

言える。

(16)　A: Would you like some coffee?

B: Coffee makes me awake.

B が翌日に試験を控えているにも関わらず，勉強が遅れていて徹夜しなければならないような状況では，B はコーヒーを望んでいると考えられ，従って A に対してコーヒーを飲みたいと伝えていることになる。これに対し，B が翌朝の試験に備えて，その日の夜はよく眠りたいと思っていて，コーヒーに含まれるカフェインの覚醒作用を心配しているという文脈であれば，逆にコーヒーは要らないと伝達しているのである。

上で「文字通りの意味」と述べたが，何を以て「文字通り」と言えるのかは，意外に厄介な問題である。関連性理論は，発話解釈の中心に推論を据える点で他の理論と一線を画している。関連性理論においては，明示的意味を表意（explicature），非明示的意味を推意（implicature）と呼んで区別するが，推意のみならず，表意を形成する過程においても，聞き手の推論が働くと考える点に大きな特徴がある。Sperber and Wilson (1995) によると，表意は次の通り定義される。

(17)　Explicature

A proposition communicated by an utterance is an explicature if and only if it is a development of a logical form encoded by the utterance.

(Sperber and Wilson 1995: 182)

(17) によると，表意とは，発話によって明示的に伝えられる命題のことであり，含まれる語の文字通りの意味である論理形式（logical form）を発展させたものである。発話を肉付けすると言い換えることもできる。例として 吉村（2013）に沿って (18) の発話を考える。

(18)　That was the last bus.　（吉村 2013: 183）

この文の意味を得るには, That に指示対象を与えなければならない。一方，last は「最後の」「この前の」「最も〜しそうにない」の内，どの意味を持つのかを決めなければならない。夜遅くにバス停に向かって走る友人に向かっ

て (18) が発話されたのであれば，これらの内，最初の意味が選択される。このことにより，「その日の内に自分の家に帰ることが出来なくなってしまった」というような解釈を引き出すことができるからである。

このように，「文字通り」と言っても，推論によって意味を選択したり，指示対象を与えるといった過程を経た上で，ようやく表意が得られるのである。代名詞の指示対象を決定するようなプロセスは飽和（saturation）と呼ばれる。これは，発話の中の語が要求する値を文脈により決定することである。一方，複数の語義から文脈によって 1 つの意味が選択されるプロセスを曖昧性除去と呼ぶ。曖昧性除去と一見紛らわしい過程にアドホック概念形成がある。(19) における computer の解釈を考える。

(19) PETER: Is John a good accountant?
MARY: John is a computer. (Wilson and Sperber 2012: 21)

(19) において，computer は辞書的な意味で用いられているのではなく，あたかもコンピュータのように，会計士として大量の数字を正確に処理できるという意味で発話されている。これに対し，(20) はどうだろうか。

(20) PETER: How good a friend is John?
MARY: John is a computer. (Wilson and Sperber 2012: 22)

ここでは，computer は感情を欠いている，といった意味で用いられている。いずれの例においても，computer は辞書的な意味で用いられていないのは明白である。曖昧性除去のように，予め脳内辞書（レキシコン）に登録された複数の意味から文脈によって特定の意味を選択するのではなく，文脈に適するように本来の意味が調整され，その場限りの（ad-hoc）概念を形成する過程をアドホック概念形成（ad-hoc concept construction）と呼ぶ。

表意を得るプロセスとして，他に冒頭に挙げた自由拡充がある。これは，表意を得る為に純粋に語用論的に補う操作である。代名詞の指示対象を決定するように，発話に含まれるある特定の表現によって要求されるのではなく，より自由に語用論的に補うということである。Carston (2002) は自由拡充の例として (21) を挙げている。

(21) a. I've got nothing to wear.
b. You can enter the club if you're 18.
c. The police hit the suspect and she had to go to hospital.
(Carston 2002: 323)

彼女によると，(21a-c) はそれぞれ (22a-c) のように補われる。

(22) a. I've got nothing [appropriate] to wear.
b. You can enter the club if you're [at least] 18.
c. The police hit the suspect and [as a result] she had to go to hospital.
（Carston 2002：323 に基づく）

[ ] 内の要素は，(22a) では数量詞 nothing の作用域を限定し，(22b) では数詞に限定を加え，(22c) では原因・結果の関係を付け足している。いずれも文中の語句からは解読は不可能で，表意を得る為に専ら文脈から補われるものである。自由拡充の例として，更に東森・吉村（2003）からの以下の例を挙げる。

(23) She took out her gun, went into the garden and killed her father [with the gun, in the garden]. （東森・吉村 2003: 37）

[ ] 内の要素を補った解釈は，もっとも自然な解釈の一つではあるが，必然的に決まる訳ではない。文脈によっては，父殺しの現場が庭でない可能性もあるし，凶器が銃ではない可能性や，凶器自体がない場合もあり得る。このように，文脈によって変化しうるという点が，語用論上の自由拡充が統語的省略と異なる点である。

3.『モダン・ファミリー』における実例の分析

本章では，米国のホームドラマ『モダン・ファミリー』のスクリプトからいくつかの場面を取り上げ，統語的省略及び語用論における自由拡充により分析し，両者の境界について論じる。[7]

[7] モダン・ファミリーは，３家族の話が同時進行するコメディドラマである。以下の分析においては，角山・Capper (2015) の巻末に掲載されているスクリプト（First Season － Episodes 1-5）を利用する。

まず，統語的省略として，VP 省略が含まれる例を検討する。(24) は，同性カップルであるキャメロンとミッチェルの会話である。ベトナムから養子を迎えた事実を家族に告白するよう，キャメロンがミッチェルに向かって迫る場面である。(24a/b) の２箇所において，それぞれ (25a/b) に示す通り，統語的省略が含まれていると考えられる。

(24) CAMERON: I **invited them over for dinner tonight.**
MITCHELL: What?
CAMERON: (a)I had to. This would have gone on forever. You're an avoider.
MITCHELL: No. No. No. No. Cam, I'm **calling them right now and canceling.**
CAMERON: (b)No, you're not. You're telling your family you adopted a baby, tonight. And you do have avoidance issues. Even Longinus said so. （角山・Capper 2015: 91-92；太字・下線は筆者）

(25) a. I had to [$_{VP}$ ~~invite them over for dinner tonight~~].
b. No, you're not [$_{VP}$ ~~calling them right now and canceling~~].

先行する発話において，ミッチェルは驚きの余り，キャメロンに発話内容を聞き返しているのに対し，キャメロンは (24a) のように答えている。ミッチェルは聞き取れなかったのではなく，驚きの余り聞き返しているだけなので，話し手のキャメロンは，敢えて発話内容（invited them over for dinner tonight）を繰り返すことなく，(25a) のように省略していると考えることができる。 (24b) においても，キャメロンはミッチェルの発話を繰り返さずに (25b) のように省略している。(25a/b) のいずれにおいても，動詞句の部分は発音されないが，to 不定詞及び助動詞の一種である be 動詞に後続することから，統語的には存在するものと考えられる。

次に (26) の会話文を検討する。これは，息子のルークに新しい自転車を買い与えることについて，父親であるフィルは前向きなのに対し，母親のクレアが反対していることから，首尾良く自転車を買い与えることが出来るよう，

フィルがルークを諭している場面である。ここでも (27) に示す通り，VP 削除を含んでいると考えることが出来る。

(26) LUKE: Dad, this is the coolest bike ever.
PHIL: Awesome. So, listen, buddy. Certain members of this family don't think you can take care of this bad boy.
LUKE: You mean Mom?
PHIL: Your words, not mine. Look, uh, your mom and I are a team... and she-we feel like this is a chance for you to show some responsibility. Don't **make us look like jerks here.**
LUKE: I won't.　（角山・Capper 2015: 134；太字・下線は筆者）

(27) I won't [$_{VP}$ ~~make PHIL and CLAIRE look like jerks here~~].

ルークは話し手であるフィルの発話の太字の部分を受けて，(26) の下線部のように応じているが，相手の発話を繰り返すことなく，(27) の通り省略して発話している。ここでも助動詞 won't で文が終わっているので，直後には統語的に動詞句が存在すると見做すことができる。

VP 省略の例として，最後に (28) を見ておく。これも (24) と同様，キャメロンと家族への告白をためらうミッチェルとの間の会話である。(28) の下線部において，(29) の通り，VP 省略が起こっていると考えることができる。

(28) CAMERON: Okay, what's up?
MITCHELL: All right, look. I-I-I never told my family we were adopting a baby. And...
CAMERON: **I know.**
MITCHELL: You do?　（角山・Capper 2015: 91；太字・下線は筆者）

(29) You do [$_{VP}$ ~~know~~]?

(28) の下線部において，ミッチェルは相手に知られたことへの驚きから，直前のキャメロンの発話内容を聞き返している。ここでも助動詞 do で文が終わっていることから，(29) のように動詞句が後続していると考えられる。

次に，統語的省略として，間接疑問縮約を含む例を検討したい。(30) はジェ

イと妻のグロリアが，妻の連れ子のマニーについて話している会話である。下線部において，(31) の通り，間接疑問縮約が起こっていると考えられる。

(30) GLORIA: He's like a bullfighter.
JAY: Mmm. You ever see a bullfight? I can't watch this.
GLORIA: **You're in such a bad mood.** And I know why. It's because that man thought you were my father.
（角山・Capper 2015: 95；太字・下線は筆者）

(31) And I know why [$_{TP}$ ~~you're in such a bad mood~~].

(30) の下線部において，グロリアは自らの直前の発話を繰り返すことなく，(31) の通り，TP 節を省略して発話していると見做すことができる。

(32) は夫婦であるフィルとクレアが互いの足の速さを自慢している場面である。ここでも (33) に示す通り，間接疑問縮約が観察される。

(32) PHIL: I always take the stairs two at a time. I don't even think about it anymore. The regular way would seem weird.
CLAIRE: Phil, let it go. I'm faster than you.
PHIL: If only there was some way **we could settle this once and for all.** But how? Huh.　（角山・Capper 2015: 118；太字・下線は筆者）

(33) But how [$_{TP}$ ~~we could settle this once and for all~~]?

(32) の下線部で，話し手は自分の発話の繰り返しを避け，(33) のように TP 節を省略して発話している。

以上が統語的省略と判断される例である。次に，『モダン・ファミリー』のスクリプトより，語用論上の自由拡充を含む例を検討する。(34) はマニーが年上の少女に告白しようとするのを，父親のジェイが思いとどまらせようとする場面である。

(34) MANNY: I put my thoughts into words and now my words into action.
JAY: Hey, I'll give you 50 bucks not to do this.
MANNY: I'm 11 years old. What am I gonna do with money?
JAY: What are you gonna do with a 16-year-old?
（角山・Capper 2015: 95；下線は筆者）

(34) の下線部において，マニーは自分の年齢を言っているが，父親のジェイにとっては分かりきったことであるのは明らかで，この発話はこのままでは認知効果を得られない。関連性を達成するには，以下のように [　] 内を補って表意とし，マニーが自らの幼さを強調していると考える必要がある。

(35)　I'm [only] 11 years old.

このことにより，たかだか 11 歳の少年にはお金など必要がないという世間一般の常識が引き出され，更には 16 歳の少女に告白するのはまだ幼すぎるという非明示的な意味（推意）にもつながるのである。(35) において only は純粋に語用論的に補われたものであることから，自由拡充の例と考えられる。

次の自由拡充の例は，養子を迎える準備をしているキャメロンとミッチェルの間で，自信が持てないでいるミッチェルをキャメロンが励ましている場面からである。

(36)　CAMERON: There are so many things that you do that I can't. Y-You baby-proofed the entire house. You took care of all the adoption paperwork. Without you, we wouldn't even have a baby to injure.
MITCHELL: Just a couple of forms. Actually, that was a lot of paperwork.
CAMERON: And you got her on all those preschool waiting lists.
（角山・Capper 2015: 123；下線は筆者）

(36) の下線部は名詞句のみからなる発話であり，このままでは命題として成立しない。そこで，(37) のように補うことで，表意を得ることができる。

(37)　The adoption paperwork was just a couple of forms.

ここで注意すべきは，(37) は文脈から純粋に語用論的に補ったのであり，(37) のように補う必然性はないという点である。例えば，(38) のような表意を考えることも可能である。

(38)　What I did was filling out just a couple of forms.

(37) と (38) のどちらにおいても，補われた語句は文脈を反映した意味に過ぎず，統語的実在を持たないという点が重要である。これは自由拡充の特徴に他ならない。

スクリプトからの最後の例として，統語的省略と自由拡充の両方が関わる場合を検討したい。(39) はフィルが姉のアレックスに怪我をさせた息子のルークに対し，お仕置きとしておもちゃの銃で撃とうとする場面である。

(39) PHIL: [Sighs] Buddy, what **are you wearing**?
LUKE: Nothing.
PHIL: Uh-uh. No jacket. One hat. How many pairs of underwear do you have on?
LUKE: One. [Sigh] Six. （角山・Capper 2015: 98；太字・下線は筆者）

ここでは下線部のルークの発話に注目する。(39) の下線部の発話は直前のフィルの問いに対する答えであり，(40) 以外の形への復元はあり得ない。従って，これは統語的省略の例であると考えられる。[8]

(40) I am wearing nothing.

一方で，(40) はそのままでは表意たり得ない。何故なら，(40) は文字通りの意味としては，ルークが全裸であることを主張しているということになるが，実際の場面ではそうではないし，屋外で全裸でいることは通常考えられないからである。ここでは例えば，「今身につけている以外には」「フィルの目に見えている以外には」といった意味の語句を補って解釈することで関連性が達成されるものと考えられる。[9] これは文脈から純粋に語用論的に補ったものであり，典型的な自由拡充の例であると判断される。このように (39) の下線部の発話においては，統語的省略がおこなわれていることから聞き手はまず (40) のように復元した上で，語用論的に肉付けして表意を得るというプロセスを踏むと考えられる。

---

[8] (39) の下線部における省略は，澤田（2016）の挙げている (10) の例（以下に (i) として再掲）と同様である。
(i)A: When are you going to leave?
B: △ Next Friday.

[9] (40) において nothing を自由拡充により補うプロセスは，(22a) の例（以下に (i) として再掲）と同様である。
(i) I've got nothing [appropriate] to wear.

4. 英語学習者にとって「省略」とは－結びに代えて

日本語には類似の統語現象を欠くこともあり，例えば You do? といった英語表現自体を文脈から切り離して，「そうなの？」といった訳語を当てただけで分かった気になり，単に相づちや驚きを表す一種の会話表現として丸覚えしようとしてしまいがちである。[10] これではその場しのぎに過ぎず，真の理解からはほど遠い。母語話者と同じレベルで発話を理解するには，これまで示してきた通り，省略部分を正確に復元して解釈することが不可欠である。その際，漠然と文脈に頼るのではなく，文法的・統語的に，一義的に決定されるものと，語用論的に専ら文脈から補われるべきものの二種類を区別するように努めることは，英語学習者にとって大いに有益であると思われる。母語話者も無意識の内に同様の区別をおこなっているのであれば，この区別は英語学習者にとって，英語を深く理解する手助けとなる筈である。

参考文献

Carston, R. (2002) *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication.* Oxford: Blackwell.

濱松純司（2021）「関連性理論における語の意味解釈－『モダン・ファミリー』を題材として」,『専修大学外国語教育論集』第 49 号 , 21–35.

東森勲・吉村あき子（2003）『関連性理論の新展開－認知とコミュニケーション』東京：研究社出版 .

今井邦彦（2001）『語用論への招待』東京：研究社出版 .

今井邦彦（2015）『言語理論としての語用論－入門から総論まで』東京：開拓社 .

角山照彦・Capper, S. (2015)『海外ドラマ総合教材『モダン・ファミリー』－

[10] 英和辞典の do の項には次のような解説が見られる。
(i) "I moved into a new house." "Oh, did you?"「新居に引っ越しました」「へえ，そうなんですか」（軽い相づちや驚きを表し，相づちなら語末を下降調で，驚きなら上昇調で答える）. （ウィズダム英和辞典 第 4 版）

三家族との出会い』東京：松柏社 .

中村捷・金子義明（2002）『英語の主要構文』東京：研究社出版 .

Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G. & J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language.* London: Longman.

澤田茂保（2012）「Spoken English の強調形式について」,『言語文化論叢』第 16 号 , 63–86.

澤田茂保（2016）『ことばの実際 1 －話しことばの構造』研究社出版 .

Sperber, D. & Wilson, D. (1986;1995[2]) *Relevance: Communication and Cognition.* Oxford: Blackwell.

Sperber, D. & Wilson, D. (2006) Relevance theory. In G. Ward & L. Horn (Eds.), *The Handbook of Pragmatics,* pp. 607–632. Oxford: Blackwell.

Wilson, D. (2017) Relevance theory. In Y. Huang (Ed.), *The Oxford Handbook of Pragmatics,* 79–100.

Wilson, D. & Sperber, D. (2012) *Meaning and Relevance.* Cambridge: Cambridge University Press.

吉村あき子（2013）「語用論」,『日英対照英語学の基礎』, 三原健一・高見健一（編）, 東京：くろしお出版 .

辞書類

『ウィズダム英和辞典 第 4 版』東京：三省堂書店 .